

11 落ちきたる滝のとどろく勢いさほひは杉生いさほにふるひ暗く地を揺る 安藤寛 (明治二五〜平成五)

佐賀県に生まれ、長崎高等商業卒。長く実業界で活躍した。大正八年「心の花」入会。新井洗に師事。「曙会」の一員として、石樽千亦の影響を受けた。この二人の先人それぞれの流れを汲む叙情歌と叙景歌に特長がある。右はその叙景歌の一首(『山郷』昭和三八年)。安藤には滝を詠んだ秀歌がいくつかあるが、この歌では動詞が多く、一首に勢いを与えている。日本青年館での全国大会における、「安藤寛、百歳！」との挨拶は記憶に鮮しい。(黒岩)

12 春がすみいよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へ 前川佐美雄 (明治三六〜平成二)

先日、奈良を通ったとき、周りの山々が霞んでいた。そのとき掲出歌が思い出された。ちょうど昼過ぎでもあった。この歌からは春がすみの奥に隠された大和の土地の持つ力が強く感じられる。佐美雄は若い頃フランスに憧れた。しかし、フランスに行くことはなかった。佐美雄は『植物祭』のモダニズムの世界を幻想するところを離れてやがては日本の風土に根差した短歌を更新していくようになる。歌集『大和』(昭和一五年)より。(服部)

13 南京路ナインチンルの夜のカフェに小猫ネコゐてすぬつちよと遊ぶ秋となりぬる 富岡冬野 (明治三七〜昭和一五)

富岡鉄齋を祖父に持ち、一六歳で信綱に師事した冬野は、瞬く間にその才能を現した。しかし、結婚し夫妻でプロレタリア運動に身を投じていた間は短歌と距離を置く。プロレタリア運動崩壊後、歌作を再開するが、映画プロデューサーの夫と上海に渡りわずか三五歳で亡くなる。掲出歌は死後編まれた歌文集『空は青し』(昭和一六年)所収。五六首の上海詠は冬野の生涯を傾けた傑作。中でもこの歌は日本的伝統美とエキゾチズムの融合が見事。(清水)

14 桃ももむく手美しければこの人も或はわれを裏切りゆかん 真鍋美恵子 (明治三九〜平成六)

一八歳で「心の花」に入会し、印東昌綱に師事。以来八八歳で没するまで若々しい作品を作り続け、九冊の歌集を残す。素材は日常に求めながらも、私性を排し人間や世界の本質に迫る独特な作風を持つ。女人短歌会に発足から参加し、歌壇でも活躍。掲出歌は『玻璃』(昭和三三年)所収。人物の「手」にのみ注目し、その手の美しさに裏切りの予感を抱く。手が持つのは瑞々しい命の象徴である「桃」。物の存在感を歌の中に強く残すのも特徴。(清水)